

Book Review 15-33 時代小説 #南海王国記

『#南海王国記』（飯嶋和一著、2025年）をkindleで読んでみた。2008年までに刊行された長編作品は、文芸誌の連載ではなく、全て書き下ろしの小説だそうだ。権力者ではなく民衆や在野の主人公からの視点で描いた作品が多い。2000年、『始祖鳥記』で中山義秀文学賞受賞。2008年、『出星前夜』で大佛次郎賞受賞。2015年、『狗賓童子の島』で司馬遼太郎賞受賞。2018年、『星夜航行』で船橋聖一文学賞受賞。

明朝末期から清朝が中国全土を制圧するまでを描いた歴史小説である（日本で言うと、徳川家光から五代将軍綱吉の初頭まで）。明朝を支持して清朝に抗う鄭成功の姿が淡々と描かれている。読んでゆくと、歴史というものは、欲望や絶望、希望、疑念、怨嗟、悲憤等、人々の想いが交錯して作られるのだと痛感する。舞台も中国本土だけでなく、日本、台湾、ビルマなど広大な範囲に及ぶ。「三国志」を彷彿させる。最後の清朝による台湾制圧は、現在の習近平が率いる中国が米国に守られた台湾を制圧する場面を妄想してしまう。

国境を脅かす騎馬民族の大軍を何度も退け、明王朝を堅守し続けた名将・袁崇煥が、私欲にまみれた宦官たちの讒言によって処刑される。それが明朝の崩壊の始まりだった。若き崇禎帝は人民の困窮などには目を向けず、自らの独裁君主権を脅かされることばかりを恐れた。ほどなく、李自成の反乱によって明王朝は滅亡した。絶対権力を持つと怠慢に墮するのは人間の性なのだろうか。

その年、二十歳を迎えた鄭成功は、漢土の沿海で最も恐れられた海賊の子だった。幼い頃から聰明だった鄭成功は科挙の受験資格を得て、南京の太学で儒学を修めた。日本人の母と中国海賊の血が流れている。幼少期は平戸で育ち、7歳のとき「父の住む安海に渡」った。広く国姓爺と知られる人物だ。

明王朝が倒れ、満州の騎馬民族が国号を清と改め漢土を席卷、明の旧臣らが続々と清に寝返っていく中で、父親・鄭芝龍の意を次いで「抗清復明」を高らかに掲げて鄭成功は中国沿岸・台湾に国を作った。儒教を学んだ鄭成功は「人間として存在するために必要不可欠な根本条件」は「『信』、つまり信義と信頼」であると信じ、明朝復興と奪われた漢民族の地を取り戻すため、「明を慕う王国」をうち建てた。だが、台湾に建てられたその国は、わずか22年の間だけ幻のように耀いた。もっと継続してもよさそうに思えるのだが、原因は内

部分分裂と絶対権力を目指す怠慢な官僚たちが民衆に寄り添った指導者を暗殺し、滅亡を呼び寄せていたのだ。

鄭成功（1624年 - 1662年）は平戸で誕生。日本名は田川福松。清に滅ぼされようとしている明を擁護し抵抗運動を続け、台湾に渡り鄭氏政権の祖となつた。明の国姓である「朱」を称することを許されたため、国姓爺とも呼ばれていた。台湾・中国では民族的英雄であり、清に対抗しオランダ軍を討ち払ったことから、台湾では中華民国の国父である孫文、初代総裁である蒋介石と並び「三人の国神」の一人として尊敬されている。鄭成功は絶望的な戦況や強敵にも決して屈しない精神がある一方、不寛容で激しく冷酷な指揮官としても知られている。彼は冷酷に行動し、必要があれば一族郎党も殺害か処刑した。軍法は厳格で容赦はない（精神疾患や感染症による影響を指摘する識者もいる）。

鄭成功が台湾で清に敗れた歴史と、現在の習近平政権による台湾への圧力は「大国による統一の試み」という点で似ているが、背景や力学は大きく異なるようだ。鄭成功は明の遺臣として台湾を拠点に清に抵抗したのに対し、習近平は経済力・軍事力を背景に台湾統一を国家目標として掲げている。

鄭成功と清の関係

- ・鄭成功（1624-1662）は明朝の忠臣で、清朝の支配に抵抗するため台湾を拠点とした。
- ・台湾は彼にとって「反清復明」の拠点であり、清に敗れた後は台湾も清の支配下に組み込まれた。
- ・この時代の台湾は国際的に孤立し、外部の強力な支援はなく、清の圧倒的な軍事力に屈した。

習近平政権と台湾

- ・習近平は「台湾統一」を 中華民族の偉大な復興の不可欠な要素 と位置づけ、平和的統一が困難なら武力行使も辞さない姿勢を示している。
- ・台湾は現在、米国や日本との安全保障関係に支えられており、鄭成功時代の孤立とは異なり国際社会の支援を受けている。
- ・習近平は国内の経済停滞や社会不安を背景に、台湾問題を利用して求心力を高めようとしている。

類似点と相違点

- ・類似点：

- 大国が台湾を「自國の一部」とみなし、統一を目指す。

- 台湾側は強いアイデンティティを持ち、抵抗の象徴となる。

- ・相違点：

- 鄭成功は「亡命政権的存在」であり、国際的支援はほぼ皆無。

- 現在の台湾は民主主義国家として国際的に認知され、日米との安全保障関係がある。

- 習近平の台湾政策は経済・外交・軍事を総合的に使う「現代的圧力」であり、単純な軍事征服ではない。

鄭成功的敗北は「鄭成功的孤立」であったが、現代台湾は「国際的連携」があり、違いが際立っている。

評価：★★★★★